

# 地域連携

地域連携の現状について  
P. 8で解説

# 地域の教育資源を生かした学校魅力化を 3町と県立高校が協働して推進

## 宮崎県立高千穂高校

宮崎県立高千穂高校は、同校が所在する宮崎県西臼杵郡を構成する3町（高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町）と連携し、2021年に「高千穂高校魅力向上推進委員会」を発足。以来、地域と協働して、生徒の学力の向上と、探究学習や地域でのボランティア活動を通じたキャリア教育の充実に取り組んでいる。

### 学力の向上と探究学習の充実、 2つの視点で魅力化を図る

宮崎県立高千穂高校は、宮崎県西臼杵郡に唯一ある県立高校だ。学校が所在する高千穂町は、全国有数の観光地として知られ、15年には、「高千穂郷・椎葉山地域の山間地農林業複合システム」が、国際連合食糧農業機関から世界農業遺産に認定されるなど、地域には教育資源があふれている。

しかし近年、西臼杵郡は宮崎県内で人口の減少率が最も高い地域となっており、同校の生徒数も年々減少。1993年度は入学者数が329人、全校生徒数が1008人だったが、21年度には入学者数は100人、全校生徒数は300人を下回った。同校は普

通科に加えて、農業、商業に関する学科を擁し、生徒の多様な進路希望に対応する体制がありながら、郡内の中学の進学率は半分程度にとどまった。

そうした状況に危機感を覚えた同校の前校長が、学校の所在地である高千穂町、そして日之影町、五ヶ瀬町に対して、地域住民に選ばれる学校になるために、地域資源を生かした学びの充実による学校の魅力化の必要性を訴えた。その後、3町の教育関係者と議論を重ね、各町の町長、教育長、議長、PTA会長や同窓会、社会教育関係者らがともに、高千穂高校の魅力化を通じて地域の活性化を図ることを目的とし、21年2月、高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町が一体となって県立高校の支

援を行つ「高千穂高校魅力向上推進委員会」が発足。3町の各役場内には、高千穂高校魅力向上推進委員会の担当窓口が設置され、高千穂高校と連携して具体的な支援策の検討を開始した。

現在、高千穂高校魅力向上推進委員会の事業は、「学力向上プロジェクト」と「地域協創プロジェクト」の2本柱に整理されている（図1）。学力向上プロジェクトでは、延岡市の民間の塾の講座をオンラインで受講する際の費用の支援や、大学・短大の公開講座に参加する際の交通費の補助など、山間部の高校生が学習面や進路選択の面で自分は不利だと感じることがなくなることを目指した施策を実行している。

また、地域協創プロジェクトでは、地域住民によるキャリア講演や、生徒が



校長  
**長友美紀**  
ながとも・みき

進路指導主事  
同校に赴任して2年目。  
語科。



河内弓枝  
かわち・ゆみえ

同校に赴任して2年目。  
語科。



高千穂町地域おこし協力隊  
高千穂高校  
魅力向上コーディネーター

のPTA会長や同窓会、社会教育関係者らがともに、高千穂高校の魅力化を通じて地域の活性化を図ることを目的とし、21年2月、高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町が一体となって県立高校の支

域で取り組む探究学習・ボランティア活動の支援を実施している。

長友美紀校長は、「高千穂町が配置した魅力向上コーディネーターと協働

# 生徒の学びの機会をどう**保障**するか?

図1 高千穂高校魅力向上推進委員会の主な事業

学力向上プロジェクト	地域協創プロジェクト
① 民間塾と連携した学力向上支援 大学進学を目指す生徒が、民間の塾の講座をオンラインで受講する際の費用を支援。	① キャリア教育 西白杵郡内で働く地域住民によるキャリア講演の実施。
② 大学公開講座受講支援 大学や短大などが実施している公開講座に参加する際の交通費を補助。	② 地域連携活動支援 西白杵郡内におけるボランティア活動や地域研修の支援。
③ 進路実現支援 面接指導、小論文対策、模擬試験監督などにかかる指導料を補助。	③ T-LABO運用支援 地方創生の拠点としての多目的スペース(T-LABO)の運用の支援。
④ 国際交流支援 外国人講師との交流を支援。	

しながら、探究学習を軸とした学校の魅力化を、生徒の姿を通して地域に伝えようと、一人ひとりの教師が努力している」と、学校の様子を説明する。「これまで本校には、教師が学校の魅力を広報する部署が置かれていますが、魅力向上推進委員会が校外に設置されたことを受けて、広報活動は管理職とコーディネーターが中心となって行い、教師には探究学習や教科学習の支援といった、一人ひとりの生徒に

生き生きとした生徒の姿を見てもらうことが、何よりの広報活動ではないか」という考えに至りました」

## 地域と学校の違いを認め合い、つないでいく

高千穂高校に常駐する魅力向上コーディネーターの工藤大裕さんは、地域

の教育資源を活用した「総合的な探究の時間」などの活動が、生徒にとって単なる「経験」で終わらず、「学び」になるためには、地域と学校のコミュニケーションが重要なだと語る。

「学校としては、生徒を単なる労働力として地域に送り出しありません。決められた作業をこなす活動よりも、活動を通して生徒が得られるものをより大きなものとするために、生

寄り添うことに注力してもらうようにしました。特に、探究学習において生徒を地域に送り出し、地域の人たちに生き生きとした生徒の姿を見てもらうことが、何よりの広報活動ではないか」という考えに至りました」

学校概要	
設立	1917(大正6)年
形態	全日制／普通科 情報ソリューション科
生徒数	1学年約90人
2023年度卒業生進路実績	国公立大は、宮崎大、鹿児島大などに4人が合格。私立大は、専修大、津田塾大、立教大などに延べ20人が合格。短大は、専門学校進学36人。就職25人。



写真1 高校の農場で栽培した釜炒り茶のペットボトルを観光鉄道の客に販売。用意した120本が完売した。



写真2 山間部であっても外国人観光客が多い地域であるため、生徒たちは英語も交えたPOP広告を作成している。

徒が自分で考えて、行動することができる余地をつくつてもらうよう

や団体と話し合うことも重要です」

高千穂町で観光鉄道を運営する企業から、同校の生徒に観光ガイドを担当してもらいたいという依頼があつた。

その活動を継続する中で、工藤さんは企業の担当者を学校に招き、生徒と話をする場を設けるなどした。

「対面して話をする中で生徒たちは、自分たちの学校で生産しているお茶を販売することで、地域と学校の魅力をアピールできるのではないかと、企業の担当者に提案しました。その企業は、生徒からのアイデアを歓迎し、当初は予定していなかつた「ラボレーション

が実現しました（写真1・2）」（工藤さん）

地域と学校の慣習の違いが、コミュニケーションの障壁となることもあります。例えば、地域からの伝統行事への参加依頼の際、募集依頼の書類が作成されていなかつたり、学校が知りたい項目が不明だつたりすることもある

（P.24図2）。そのような場合は、コーディネーターが地域住民から依頼内容の聞き取りや資料の確認を行い、学校向けの実施要項の作成についての助言を行つたり、時には工藤さんが住民に代わつて要項を作成したりすることもある（P.24図2）。そうした「コーディネーターの役割の重要性を認めつつ、

図2 地域と学校をつなぐコーディネーター

高千穂高校には、高校生との協働を希望する地域の企業や団体から多くの依頼が来るが、地域の伝統行事などの中には、住民同士が口頭で連絡を済ませたり、高校などに提出すべき文書がなかったりすることも少なくなかった。そこでコーディネーターの工藤さんは、地域からの要望を聞いたり、チラシなどの資料を見たりした上で、企業や団体に「このような情報を盛り込んだ依頼書があると、高校でも生徒に案内しやすい」と助言している。

#### ● 地域から提出されたチラシの例



- コーディネーターが企業・団体に助言した、依頼書に盛り込むとよい項目

- ・生徒を拘束する日時（集合から解散まで）
  - ・活動場所、集合場所
  - ・募集する人数、生徒に求める条件
  - ・生徒が準備するもの（昼食など）
  - ・担当者の名前、連絡先

- コーディネーターの助言を基に作成された依頼書（一部）

も参加していただき、例大祭を一緒に盛り上げたいと考えておりますので、御多忙な折  
り際にお詫び申しあげますが、本日の趣旨を御理解いただき、多くの生徒の参加に協力  
いただけますようよろしくお願いいたします。

なお、当日の行程等は下記のとおりでございます。ご不明な点などございましたら、  
下記連絡先まで遠慮なく御連絡ください。

記

1 日 時 令和6年10月14日(日)  
例大祭は午後1時から午後4時まで

2 集合場所 高千穂町三田井809-1  
(高千穂町観光協会事務所の東隣に會事務所があります)  
午後10時までに集合をお願いします。

3 その他 法被と黒食は本會で準備します。  
集合場所にて着替えますので服装でお暇しください。  
必ず参加人数等を把握していることから、恐れ入りますが別紙申込書  
を10月9日(木)までに作成いただき連絡願います。

同校では、地域住民が自由に利用できる多目的スペースを校内に設置し、学校と地域との接点を増やしている。長友校長は、「人の数が少なく、規模が小さくとも、生徒、教師、地域住民が結びつけば、元気な学校、元気な地域になる」と語る。

「3町の住民の方々から、『最近、高校生が町で活動している様子をよく田にするようになつてうれしい』といつた言葉をかけてもらうようになりました。地域の中で学校の存在感が高まっていることをひしひしと感じています」（長友校長）

長友校長は、「私たち教師が、学校のあたり前を地域に求め過ぎないことも大切だ」と考へていらる。

「教師が、『学校には』『ひこう文書が必要です』『ひこうスケジュール感で進めてください』と、地域に強く要求してしまうと、地域との連携は停滞するでしょう。生徒の安全を確保した上で、地域の方々を信頼し、可能な限り生徒を地域に送り出すことで、学校の扉は大きく地域に開かれるのだと思います。私たち教師が注力すべきは、地域との折衝以上に、地域での活動が生徒にとってどんな学びの機会として期待されるのか、実際にどんな学びを

異なる視点での支援を  
間近に見て、教師も学ぶ

得たのかを、生徒一人ひとりとの対話を通して、明らかにすることです。コーディネーターが人と人をつなぐ存在であるならば、私たち教師は、生徒の経験と学びをつなぐ存在であり、その役割を果たすことにより一層注力していきたいと思っています」（長友校長）

杵郡内の中学校から同校への進学率も着実に上昇しているといつ。進路指導主事の河内弓枝先生は、土学入試や就職試験の面接において、地域での探究学習の成果や、地域の行事への参加を通して得た学びをアピールし、希望進路を実現する生徒が増えていると説明する。

「地域」における活動の成果をさらに生徒の希望進路の実現につなげていくためには、私たち教師が、探究学習における生徒の支援のあり方をもっと追究していくことが必要です。地域と学校の両方に軸足を置き、生徒にとつての最適解を模索する「コーディネーター」

の生徒へのかかわり方は、生徒を答えるに導くことを得意としてきた私たち教師とは明らかに異なります。コーディネーターと生徒が探究学習について語り合っているところに若い教師が同席して、伴走のあり方を学ぶ様子がよく見られます。

は、生徒数が激減した母校への赴任に、当初は不安を感じていたという。「学校から活気がなくなつてしまつたのではないか」と心配でしたが、赴任してみると、それは杞憂だったことが分かりました。地域の教育資源を生かすことでも、都市部の学校に負けないくらいの活気があると思っています」

長友校長は、「私たち教師が、学校のあたり前を地域に求め過ぎないことも大切だ」と考へています。

得たのかを、生徒一人ひとりとの対話を通して、明らかにすることです。コ

杵郡内の中学校から同校への進学率は、着実に上昇しているといつ。

の生徒へのかかわり方は、生徒を答えるに導くことを得意としてきた私たち教